

令和3年度 奈良市立伏見南幼稚園 研究実践概要

園長名 藤田 香予子

全園児数 34名

1. 研究主題 「いきいきと遊び つながりあう子どもを目指して」
～「なんだろう?」「やりたい!」から～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

社会状況の変化やコロナウイルス感染対策等で、人と関わるのが難しくなっている。生活の基盤となる家庭の実態も多様化し、子ども達にも経験の差が見られる。幼稚園で生活し、身近な環境に関わり、自ら気付いたり、考えたり、試したりしながら遊ぶことで、一人一人の意欲が高まり、人やものとのつながりを喜び、いきいきと活動する姿になると考え、この主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

身近な環境や人と心を動かして関わる姿を見取り、省察し、必要な援助や環境の工夫について探る。

②研究の重点

- ・好奇心や探究心をもって遊んでいる一人一人の姿を捉える。
- ・「もの」「ひと」「こと」と関わり、意欲的に遊べる保育内容や援助、環境構成の在り方について探る。

③活動の方法

【事例1】4歳児「ここにも見つけた!」(5月)

- ねらい ○ 砂や泥、水の感触に親しみをもって、好きな遊びを楽しむ。
○ 保育者や友達存在を身近に感じ、同じ場で遊ぶことを喜ぶ。

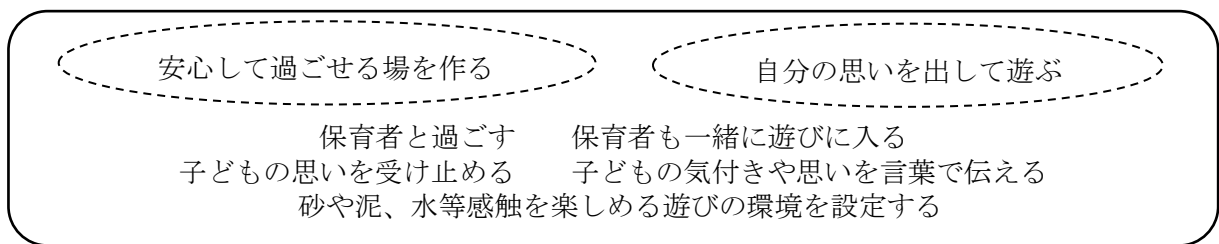
砂場で、道をつくったり、水を流したりしながら1人で遊んだり、保育者と過ごしたりしながら思い思いに好きな遊びを楽しむ姿が見られる。

心が動く姿

子どもの姿	保育者の援助	心が動く姿からの見取り
A児 道に流した水が流れるように、流したい方向へ向けてスコップで掘っている。 B児 泥水が溜まったところが泡立っているのを見つける。 <u>「あ、ここ茶色になったどろどろがいっぱい」と、自分なりの発見を嬉しそうにつぶやく。</u> A児 <u>「なにになに?」と、その様子をのぞいてきた。</u> B児 泥を見つけたことを言いたそうにしているがうまく言葉にして伝えられない。	わあ、ほんとだね。Bくんが見つけたの? 触るとおもしろいね」と思いを受け止める。 「Bくんが泥を見つけたんだって、触ってみたらおもしろいよ」と、	自分の好きなことを見つけて楽しんでいる。 見つけて、心が動いたことを言葉で表す。 保育者の言葉を聞き、体、心、言葉(表出)が「なんだろう?」と動く。

<p>A児 <u>「ほんとだ」と分かり、泥や見つけたところが泡立っている感触を楽しむ。</u> B児 <u>「あ、ここにもある」と見つけ、2人で水を流している先を見に行く。</u></p> <p>A、B児はそれぞれで遊んでいたが、泥や水の感触を味わいながら一緒に遊ぶことを喜び、友達や保育者とかかわりあいながら遊び続けた。</p>	<p>言葉を代弁する。</p> <p>2人の思いに共感し、頷いて思いを受け止める。</p>	<p>うまく言えずにもどかしい。</p> <p>自分の知りたいことがわかり、動き出す。 A児の言葉や保育者の認めで「もっと!」と思う。 A、B児の「どろどろの泡」への「なんだろう?」「触ろう」が共通化する。 保育者が一緒に遊ぶことで友達を意識する。</p>
--	---	---

研究主題につながる援助



【事例2】4歳児「バッタを捕まえない」（9月）

- ねらい ○ 気の合う友達と誘い合いながら好きな遊びを楽しむ。
- 自分の思いを話そうとしたり、友達と言葉を交わしたりすることを喜ぶ。

園庭でいろいろな虫が見られるようになり、5歳児が虫取りをする姿を見て、「ぼくもやってみたい」と虫探しが始まった。

心が動く姿

子どもの姿	保育者の援助	心が動く姿からの見取り
<p>A児 <u>「バッタが捕まえない」と、虫網と虫かごを持って虫探しに出掛ける。</u> 園庭の草むらに行くが、なかなか自分の思うようにバッタを捕まえられない。5歳児がバッタを捕まえた様子を見ている。</p> <p>B児 「さっきはバッタは山のところにいた」と、A児に伝える。 B児 <u>「ここにいたんやで」と自分なりに知っていることを知らせる。</u> 5歳児 A、B児のやりとりを聞いて「こんな風にするんだよ」と、<u>捕まえ方を教えてくれる。</u> A児 <u>「うん、わかった」といって、自分なりに何度も繰り返す。</u>すると「あ、先生!つかまえた」と嬉しそうに話す。</p> <p>B児 「Aくん、やったね」「どんなバッタ?」と、一緒に喜んでいる。</p>	<p>A児の困っている様子を把握し見守る。</p> <p>「Aくんも行ってみる?」と誘い、一緒に行く。</p> <p>「Aくん、すごいね」と認め、周りで一緒に虫取りをしていた他児に知らせる。</p>	<p>自分がやりたい遊びに必要なものを用意し活動する。 自分のもどかしさ、困り感を表せない。どうすればいいのか。 困っている友達に自分の知っていることを伝えたい。</p> <p>友達のアドバイスがあったり挑戦を続けたりしたら、できることがわかった。 友達と一緒にいると嬉しいことが膨らむ。</p>

その日の話し合いで、クラスの友達に自分が捕まえたバッタを見せる。
保育者が「最初は捕まえるのが難しかったんだよね」と、A 児に問いかけると「でも、ほし組さんが教えてくれたの」と自分なりの思いを言葉にして、嬉しかったことを友達に伝える。

研究主題につながる援助

友達や異年齢児の存在

友達の様子に気付く声掛けをする 5 歳児との自然な関わりが楽しめる雰囲気がある
友達や 5 歳児を身近に感じるように保育者が橋渡しをする
遊びに必要な用具を自分たちで用意できる環境を設定する
目的（虫を捕まえる）のために自分や友達と考えたり試したりできる時間の確保をする
自分なりの表現が友達や保育者に認められる機会がある

(.....環境構成保育者の援助心が動く姿)

【事例 3】5 歳児「ドッジボールしよう」(11 月)

ねらい ○ 友達と一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。

○ 友達とルールを考えたり、話し合ったりしながら、ドッジボールを楽しめるように取り組む。

A 児「ドッジボールしようよ」と、友達と誘いドッジボールが始まった。B 児や D 児も一緒にしていたが、ルールが分からなかったり、当たることが嫌という理由で辞めたりで続かなかった。そこで、子ども達と一緒にドッジボールのルールについて確認することにした。

「ドッジボールってどんなゲームか知ってる?」と、子ども達に尋ねると、A 児「当てられたら、外に行くねん（コートの外に行く）」と話した。すると、B 児「チームで対決するゲームやねん」と話した。C 児「転がしドッジと一緒に?」と、4 歳児にしていたことを思い出して話した。

ドッジボールを知っている子と、全く経験したことがない子がいるので、大きなホワイトボードを用意して、子ども達の話していることを書いていった。すると、D 児「あっ、お兄ちゃんしてる!」と、兄や姉のいる子ども達が話に興味をもち始めた。そこで、「コートは何個あるの?」「何人をするの?」「当たった人は、コートのどこに行くの?」など、ルールにつながるような問いかけを子ども達にし、話し合いを進めていった。

話し合いの中でルールが少しずつ分かり始めると D 児「当たってもまた、当てたら復活できるねんな」 B 児「そんなに難しくないやん」と笑顔で話した。

<反省・評価>

- ・経験の中で、ドッジボールを知っている子と知らない子がいた。そのため、一緒にしたいという A 児の思いがあっても、遊びが続かなかった。遊びの中ではその時々ルールを伝えていたが、個々への対応になり、共通理解が難しかった。ルールについて話し合う時間をもつことで、兄や姉としたことのある子もいて、話し合いが進んでいった。当たったら嫌と感じていた子たちも、ルールを知ること、やってみようという思いが高まっていき、話し合いをきっかけに、ドッジボールをしようと参加する友達が増えていった。

研究主題につながる援助

共通理解をする

ルールにつながるように保育者が発問し、話し合う時間をもつ
互いの経験を伝え合う
クラスみんなで話し合ったり可視化したりし、遊びの内容やルールを理解できるように援助する

【事例4】5歳児「一緒にがんばれるやん」（2月）

ねらい ○ 生活発表会に向かって、友達と互いの考えや思いを出し合い協力しながら取り組む。

生活発表会『スイミー』に向けて、スイミーの役の7人の子ども達が、7人全員で場面に出るのか、チームに分かれて出るのかを決めることになった。A児「7人で出たら多いな」B児「でも、みんなでした方が楽しいんじゃないの?」と意見が分かれていた。C児「1人ずつするのは?」A児「でも・・・それは、いらんな。話すとき、いらん」と、思いを伝えた。話は、平行線のまま、決まらない。そこで、子ども達に「1人で話すと、この場面で分かれるかな? 2～3人で話すと、この場面に出ることになると思う。全員で出ると、話す時にみんなの声を揃えたりするのは難しいかもしれないかな?」と、3つの場合での状況を話す。C児「みんなで揃えるのは難しいから、全員はやめた方がいいと思う」D児「僕もそう思う」と意見が出た。その意見を受けて他の子ども達も「じゃあ、全員はやめよう」と決まった。そこで、1人ですか、2～3人ですかになった。D児「僕は1人でやってみたい」A児「僕は、1人はいらん。」B児「どっちでもいいかな・・・」と話が出た。「1人でしたい子と、2～3人でしたい子に分かれもいいよ」と、提案をする。B児「でも、みんなでがんばりたいしな」と、生活発表会に向けての思いを話す。C児「友達としたらいいやん。チーム（2～3人）になってしたら、一緒にがんばれるやん」と話すと、「そうしよう」と意見がまとまり、2～3人のチームに分かれて、スイミーの配役をすることになった。

<反省・評価>

- ・互いの思いを伝え合い友達の考えを知ることができたが、平行線のまま、話し合いが進まなかった。役を1人ずつするのか、複数でするのかという保育者の具体的な提案により、子ども達は見通しをもち考えることができ、活動に取り組めた。
- ・今までの経験や、昨年度の生活発表会を振り返り、友達とどんなふうにしたいのか、考えて決めることができた。生活の中で、友達と一緒に取り組み、できたことへの達成感を感じていたから、「友達と一緒にしたら、がんばれる」というB児の言葉がでてきたのではないかとと思う。特に5歳児になると、そういった経験の積み重ねが大切だと再確認することができた。

研究主題につながる援助

見通しをもって取り組む

保育者が状況に応じてヒントとなる言葉掛けや具体的な方策の提示をする
友達と一緒にしたらできた、楽しかったという体験を積み重ねていく日々の生活を
子どもと一緒に作る

5. 研究の成果

- ・友達や保育者など人との関わりが刺激となり、「なんだろう」「おもしろそう」「やってみたい」という意欲や態度につながった。
- ・じっくり遊びに取り組める場や時間を確保したこと。また、保育者が遊びの場を共有しながら子どもの思いや発見を言葉にして伝え合い、共感することで、友達の存在に気付いたり、友達と関わりながら遊びを楽しんだりする姿が見られた。
- ・保育者が一人一人の子どもの思いや考えを受け止め、子どもの話をボードに書いて可視化しイメージを共有したり、見通しをもったりできるよう援助をしたことで、「やってみたい」という意欲や友達と一緒に遊びを進めていこうとする姿につながった。

6. 今後の課題

- ・子ども達の興味・関心がどこにあるのか見取り、やってみたくなる環境構成と一人一人の気付きや思いを引き出したり、つないだりするための援助の工夫を行う。
- ・友達とつながる楽しさを感じられるよう遊びや活動の充実を図る。